復活の武士道

救世の民に贈る

与国 秀行

何千年と続く宗教問題

今、世界はパレスチナ・イスラエル問題を巡って、第三次世界大戦の危機にあります。

核兵器の理論を発見したアインシュタインは、記者から「第3次世界大戦では、どんな兵器が使用されると思いますか?」と質問されて、こう答えました。

「第3次世界大戦でどんな武器が使用されるかは

分からない。ただこれだけは断言できる。その次の戦争では、人類は石とこん棒を使うことになるだろう」

つまりアインシュタインは、「もし第3次世界大戦が起きてしまえば、人類は文明を滅亡させて、再び原始時代からやり直すことになる」、そう述べたわけです。

しかもこの中東を巡る問題は、ここ数十年で始

まった問題ではなく、古くまで起源を遡れば、数千年と続く宗教問題と言えます。

なぜなら『旧約聖書』の創世記１２章７節にはこうあるからです。

「時に主はアブラム（後に改名）に現れて言われた、『わたしはあなたの子孫にこの地を与えます』」。

このようにアブラハムという方が、神より啓示を受けて、「約束の地」を与えられたことに、この

問題は端を発しているわけです。啓示とは、「神」などの超越的な存在から真理、あるいは通常では知りえない知識が与えられることを言います。

「ハルマゲドン」、この言葉はとても有名ですが、しかし『新約聖書』の中でたった1回だけ、「ヨハネの黙示録」の16章16節に登場します。これは「メギドの山」という意味であり、「メギド」とは古代イスラエルにあった町の名前ですが、この土

地で世界最終戦争が起こると言い伝えられているわけです。

「パレスチナ」とも、「イスラエル」とも呼ばれているあの土地には、「エルサレム」というユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地があり、実はこれらの3つの宗教は、「アブラハムの兄弟宗教」とも呼ばれていて、同じ系譜を引いています。

同じ系譜を引く宗教でありながらも、「宗教の違

い」を乗り越えられずに、人類は今、滅びの危機を迎えてしまっているわけです。

異なる宗教を融和させた日本人

かつて日本人の家には、どの家庭にも神棚があり、日本人は神々の御前で手を合わせ、仏壇も拝んでいました。そのかつての日本人には、神仏に対す

る信仰心がありました。しかし現代では、「目に見えないものは信じない」という考え方が主流となり、信仰心が薄れてしまいました。

そのために宗教紛争を目の当たりにして、「宗教は争うから嫌だ」と思う方もいらっしゃるかもしれません。

しかし日本人こそ「異なる宗教でも調和できる」ということを、世界で最も知っている民なのです。

今から約二千六百年前のインドに、ゴータマ・シッダールタという方が現れ、悟りを開かれ、大悟され、仏陀と成られて、その教えが「仏教」としてアジアに広がり、日本にも伝わりました。

日本人は、遥かなる太古の昔より、自分たちの民族的宗教「神道」を重んじてきましたが、神道と仏教は異なる宗教であるはずなのに、日本人は見事に「和の心」でもって、この2つの宗教を融和させ

たのです。

これを「神仏習合」と言います。「習合」とは、異なる宗教が融合することであり、聖徳太子の尽力もあって、日本人は「神仏習合」を成し遂げたわけです。

この時より、神社に祀られている八百万の神々は、仏の教えを学ぶ存在であると共に、仏を守護する存在でもある、そのように考えられるようにな

りました。

神道の最高神主であられる天皇陛下をはじめ皇室の方々も、仏教に帰依し、仏教は国教となりました。

しかもインドに仏陀が現れたちょうど同じ頃、中国には孔子という方が現れて、儒教が興り、儒教は日本にも伝わりましたが、日本人は「儒家神道」として儒教をも神道と融和させました。

つまり世界は今、同じ系譜を引く3つの宗教によって、人類滅亡の危機を迎えているというのに、日本人は「和の心」でもって、神道、儒教、仏教という異なる3つの宗教を奇跡的に融和させたわけです。

日本人こそ知っている

では、それら3つの宗教から、果たして日本人は何を生み出したのでしょうか。

江戸時代の侍であり、思想家でもある山岡鉄舟という方は、こう述べました。

「武士道とは神道にあらず、儒道にあらず、仏道にあらず、武士道とは神儒仏、三道融和の道念」

これはどういった意味でしょうか。

たとえば儒教の祖であられる孔子はこう述べました。

「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」

つまり孔子という方は、「明日の朝に人間が生きるべき正しい生き方を知り、そしてそれを体得することができたら、その日の夕方に、自分は死んでしまっても構わない」、そう述べたわけです。

古来より人類は、洋の東西を問わず、「人間とし

ての正しい生き方」に対して、「道」と名付けて呼んできました。「剣道」や「茶道」に「道」という言葉がついているのは、「剣」や「茶」を通じて、人生に対する学びを深めて、人間としても成長していこうという想いが、そこに込められているからです。

そして「道を求めて学ぼうとする想い」のことを、「求道心」とか、「道念」と云います。

つまり山岡鉄舟という侍は、「武士道とは、神道、儒教、仏教そのものではない。武士道とは、これら三つの宗教が融和したものであり、これらを学んで人間としての正しい生き方を探る求道心の先にあるもの、それこそ真(まこと)の武士道である」と、そう述べたわけです。

「宗教同士は必ずしも争うものではなく、調和し合うこともできる」ということを世界で最も知っ

ている民、それが武士道を築き上げた私たち日本人です。

言葉を変えれば、日本人こそ世界を救うために、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒たちに伝えるべき道がある、とも表現できるかもしれません。

忘れられた宗教の意義

しかし日本人は今、中東における宗教紛争のみならず、『旧統一教会』の解散請求の問題などを巡って、さらに宗教のことが嫌いになっているかもしれません。

それは見方を変えてみれば、日本人および人類には今、「宗教は必要なのか?」という問が投げかけられているのかもしれません。

では、「宗教」とは、果たして何でしょうか？

たしかに『オウム』のように、宗教の中には間違ったものもあります。

では本当に人類は、「宗教とはすべて、人々を狂わせ、不幸にし、社会的な大事件を起こすもの」と定義することができるのでしょうか。

人類数千年の歴史が、尊敬し続けてやまない仏陀やイエスを、もし「狂人」呼ばわりする人がいる

ならば、その人こそ、世の人々の前に歩み出て、自らが狂っていないことを証明するべきではないでしょうか。

もし彼らの教えを、一笑に付す自信があるならば、まずその人が、彼ら以上の人格者であることを、証明するべきではないでしょうか。

しかしそんなことができるはずもありません。なぜなら宗教とは、確かに間違ったものもありま

すが、正しいものもあるからです。

では、宗教とは果たして何なのでしょうか？

たとえば１９２０年のインドにおいて、アマラとカマラという２人の少女が見つかりました。彼女たちはオオカミに拾われ、育てられたために、５、６歳で人間に発見された時、話すことも、二足歩行もできずに遠吠えをし、暗闇でも四足で走り、共に幼いうちに亡くなってしまいました。

この話が何を意味するかと言えば、「人間には教育が必要である」ということです。人は誰もが教育を受けなければ、狼になってしまう可能性があるわけです。

では、人間を人間たらしめる教育とは何でしょうか。

国語は言葉の教育であり、数学は数の教育であり、科学の本には、核兵器の作り方は書かれていて

も、それらを使いこなす「人間としての正しい生き方」については、何も説かれてはおりません。

宗教こそ、狼になりかねない人間に、「道」を説く「教育の原点」であり、さらには「文明の源流」なのです。

実際に、欧米の文明の根底にはキリスト教が、アラブの文明にはイスラム教が、アジアの文明には仏教が、中華文明には儒教が、そして日本文明には

神道が存在しています。

確かに間違った宗教もありますが、しかし正しい宗教も存在し、そして正しい宗教こそ、「教育の原点」であり、「文明の源流」なのです。

霊的人生観の重要性

もし人類が、「宗教は要らない」という結論にい

たれば、世界は「神は存在しない」という無神論、「物がすべてで、死んだら何もかも終わり」という唯物論に支配されることになります。

中国や北朝鮮、あるいはかつてのソ連や東ドイツなどの国々は共産主義国家ですが、共産主義の根底には、宗教の存在を否定した無神論・唯物論があります。

そして人間は無神論、唯物論に染まってしまい

ますと、「見つからなければ良い」とか、「法律の網をかいくぐればよい」という考えになってしまい、善悪が麻痺してしまいます。そうした考え方に基づいて国家運営すると、道徳が薄れた社会になってしまいます。

「天網恢恢疎にして漏らさず」、これは道教の言葉ですが、つまり「天が張り巡らした網は、粗いように見えるけれども、しかし悪事を行えば、たとえ

一時的に逃げられても、必ずその報いを受けるという意味です。

これを仏教では、「因果の理法」という言葉で教えています。天国や地獄、あるいは来世、来々世という生まれ変わりの中で、人は必ず自らの想いと行いの報いを受ける、そう仏教では教えているわけです。

なぜなら、たとえ数十年の人生では「善因善果・

悪因悪果」とは成らずとも、人はたとえ肉体が滅んでも、霊として生き続けるために、「因果の理法」は何ぴとたりとも晦ますことはできないからです。

同じことは『聖書』でも説かれており、「人は自分が蒔いた通りに刈り取らねばならない」と教えています。

人間が宗教を否定して、唯物的な人生観を持てば、「見つからなければいい」という価値観に染ま

り、自己中心的で、傲慢な人生を生きてしまいがちです。

しかし人間は、正しい宗教によって得られる霊的なる人生観を身につけていくことができれば、自己中心的に傲慢に生きることが、いかに愚かであるかを知ることができるのです。それと同時に、愛を与えて生きることの大切さも分かっていきます。

なぜなら人が死んで、あの世に持って還れるものは心しかないからです。そのために自らの美しき心を、より美しく磨くことこそ、本当は人生において、とても大切なことだと悟れるのです。

悟りと侍精神

しかも「死んでもまだ生命は続いていく」という

霊的人生観であればこそ、人は勇気ある人生を生き抜いていくこともできます。

つまり正しい宗教とは、人々に真理を教えることで、霊的人生観を授けて、愛と勇気に溢れた人生を生き抜かせていくものなわけです。

武士道精神とは、まぎれもなく宗教的精神であり、人は霊的人生観を築き上げるからこそ、優しくも勇ましい侍精神を培っていくことができるので

す。

たとえば西郷隆盛は、山岡鉄舟に対してこう述べました。

「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」

と。

「始末の困る者」とは、お金とか、名誉とか、地

位とか、そんなものには見向きもせず、信念のためなら命さえ投げ出せる者のことです。「信念の塊で、なおかつ無欲な者でなければ、共に天下の大業は成せない」、そう西郷隆盛は述べたわけです。

実際に、日本の夜明けを夢見て西郷隆盛と共に戦った坂本龍馬は、追われる身となり、金銭もろくに無くなって、西郷隆盛の嫁に、「使い古しでいいから褌をくれないか」と頼んだことがあります。そ

の話を聞いた西郷隆盛は、「彼は国家のために天下を奔走(ほんそう)している人であるから、新しいのを買って差し上げなさい」と、言ったそうです。

その坂本龍馬も、よく人にこんなことを述べていたそうです。

「人は事を成すために生まれてきた。しかしこんな時代だ。志半ばで命尽きることもあるかもしれない。ならばたとえドブの中で命尽きようとも、前

のめりで死んでいきたい」

その他にも南北朝時代、「湊川の戦い」において、足利尊氏軍３万５千人に対して、楠木正成軍はたったの７００騎で立ち向かいました。

その戦力差は実に約５０倍以上でしたから、誰もが簡単に勝敗がつくと思いました。しかし楠木正成は、わずか７００騎の軍勢を率いて、数十倍の敵に対して、１６回にも及ぶ突撃を繰り返しまし

た。

それでもやはり最後は多勢に無勢、突撃の度に、正成軍は倒れる兵が増加し、６時間の激闘の末、残った者はわずか７３騎でした。

楠木正成は生き残った７３名の部下と共に、死出の念仏を唱えて火を放ち、自刃しました。

この時の彼の言葉、それが有名な「七生報国」です。これは「七度生まれ変わっても、自分は天家国

家に報いる」という意味であり、この「生まれ変わり」の思想は、仏教の転生輪廻の教えによるものです。

楠木正成は「侍の鏡」として尊敬されてきました。そして幕末から明治維新以降、彼の特攻精神は、「楠公精神」として侍たちの間で語られました。死をも恐れずに、愛と勇気で戦う侍精神の根底には、仏教を始めとする宗教的な悟りがあったの

です。

宗教をすべて否定してしまえば、共産主義のように、善悪が麻痺した道徳の乏しい世の中となってしまいます。ですから宗教の正邪を見抜く目を持って、間違った宗教は否定すべきですが、正しい宗教は肯定すべきなのです。

なぜなら日本人は、神道、儒教、仏教を肯定したことによって、武士道は築き、国を築いてきたから

です。

武士道が廃れた理由

しかしすでに述べましたように、日本人は、宗教の意義と共に悟りの価値を忘れ、信仰心も失い、そのために武士道も廃れてしまいました。

奈良の大仏は、５年の歳月をかけて７５２年に

完成し、当時の日本の総人口のうち、3分の2の約2６０万人以上が建造に携わりました。

関西大学が行った研究と調査によると、大仏の建造費用は総額で約4，６５７億円です。これはディズニーランドとディズニーシーの建設費を合わせた額に匹敵しています。

奈良の大仏の建立は、聖武天皇を始めとする皇室と、行基菩薩を始めとする仏教徒たち、そして日

本の国民が一丸となって行われた一大プロジェクトでした。

当時の日本は、今と同様に疫病が流行り、震災が起こり、政治も混乱していました。

そうしたことから、国家鎮護を祈念して奈良の大仏は建立されたのです。そこには、「日本人が未来永劫、仏への信仰を忘れることがないように」との想いも込められていました。

また、日本は先の大戦に敗れましたが、ＧＨＱの占領軍は、敗戦からわずか四カ月後に、「神道指令」を発令しています。つまりＧＨＱは、遥か昔から、常に日本の中心にあった神道を、日本の隅に追いやったのです。

そのために日本では、多くの日本国民が、八百万の神々の名前どころか、神道が自分たちの民族的宗教であるという事実さえ知りません。

またＧＨＱは、かつての日本で当たり前に行われていた「修身」という儒教教育も排除しました。

かつての日本では、一人一人が自らの身を修めるからこそ家庭が斉い、一つ一つの家庭が斉うからこそ国家が治まり、一つ一つの国家が治まってこそ天下が平らかになる、という「修身斉家治国平天下」ということが教えられていました。しかしＧＨＱは「教育改革」と称して、日本人から儒教も取

り上げたわけです。

またＧＨＱは「農地改革」と称して、神社やお寺から土地を取り上げ、宗教家の経済基盤も奪いました。

一方で仏教は、二千六百年という長い月日の中で、心の教えが失われてしまい、いつしか葬式仏教、観光仏教へと堕落してしまいました。

こうして神儒仏から成り立っていた武士道が廃

れ、日本人は信仰心と共に侍精神を忘れてきたわけです。

皆が魂の兄弟

今から二千年前はキリスト教も新興宗教であり、今から二千六百年前は仏教も新興宗教に他なりませんが、宗教というものは、「新しさ」や「古さ」

ではなく、その中で説かれている人々を導く力、真理が重要です。

真理とは、「真の理」と書くように、真実の法則であり、不滅の法則、宇宙を貫く永遠の法則のことであり、人々に「悟り」を与えるものです。

悟りとは、人間としての成長であり、智慧を身につけていくことであり、魂の進化です。

悟りとは、この世において、この世ならざるもの

を学ぶことによって得られる霊的覚醒です。

悟りとは、神仏の子である私たちが神仏に近づいていくことでもあります。

人類は今、宗教紛争によって滅びるか、それとも「悟りの力」によって繁栄の未来を切り拓いていくか、という岐路に立たされていると言えます。

では、それぞれの言い分は、どのようなものなのか、簡単にご説明いたします。

ユダヤ人たちは「自分たちには国が無いから迫害を受けた。ここは自分たちが神に約束された土地である」と主張しています。キリスト教徒（福音派）の人たちは、「キリストの再臨にはユダヤ人国家イスラエルは欠かせない」と考えています。イスラム教徒の人々は、「ここは我々が住んでいた土地であり、ユダヤ人が迫害を受けたのはヨーロッパであり、『コーラン』には『迫害者は殺しても構わ

ない』とある」と主張しています。

どうやらユダヤ教、キリスト教、イスラム教、それぞれに問題があるようです。では、「アブラハムの兄弟宗教」の果たして何が問題なのでしょうか。

『幸福の科学』では、「人は皆、神仏より別れてきた存在であり、そういった意味では皆が、魂の兄弟である」と言う真理が教えられています。

私たちは、宇宙に繁栄と進歩をもたらすために、

遥かなる昔に、偉大なる神仏の魂が分かれて、魂修行をしている存在なのです。一人一人の人間は、姿や形は違いますが、しかしその根源において、その創造において、実は一つであった、これが真理です。

ですからこの地球に生きている約７０億人の人々すべて、地上を去ったあの世にいる５００億の人すべての魂が、仏の子としての兄弟である、これは『幸福の科学』の初期の頃から、説かれている

真理です。

だからたとえ自分や他人が、いかなる宗教を信じていようとも、他の者を酷評したり、他の者を冷酷に、無慈悲に扱うということは、大きな間違いなのです。異教徒だからって、自分たちの都合で暴力を振るったり、殺害してはならないのです。

しかもユダヤ人とアラブ人にいたっては、「セム族」という同じ民族であり、なおかつ彼らは、共に

アブラハムの子孫でもあります。

しかしそれでも彼らは、「宗教の違い」によって争いを続け、ハルマゲドンの危機を招いているわけです。もしかしたらこの宗教問題は、人類に仕掛けられた、そして絶対に人類が回避しなければならない、時限爆弾なのかもしれません。

中東問題の難しさ

人類を滅亡しかねないこの宗教問題は、政治による解決だけでは、解決不能と言えます。

たとえば１９７９年、エジプトのサダト大統領はイスラエルを国家として承認し、一方のイスラエルは、シナイ半島をエジプトに返還することに合意しました。

こうして「エジプト＝イスラエル平和条約」が調

印され、サダト大統領はノーベル平和賞を受賞しました。

しかし彼は、過激派エジプト人に殺害されました。敵対していたユダヤ人に殺害されたのではなく、イスラエルに譲歩する大統領を、快く思わない過激派イスラム教徒のエジプト人が大統領を殺害したのです。

そして今からちょうど三十年前の１９９３年、

イスラエルのラビン首相とＰＬＯのアラファト議長との間に、「オスロ合意」が行われました。ＰＬＯとは、イスラエルによって占領されている、パレスチナのアラブ人の解放を目ざす武装組織のことです。

それまでイスラエルは、ＰＬＯをパレスチナ人の正式代表とは認めていませんでした。イスラエルは、ＰＬＯとの間に、パレスチナ人の独立と国家

建設を承認し、一方のＰＬＯも、「暴力とテロを断つ」という約束が交わしました。

この「オスロ合意」の直後、ニューヨークからやって来た医師でユダヤ人のゴールドシュテインは、モスクに入るなり、銃を乱射し、２９人のイスラム教徒を殺害、１２５人を負傷させました。

問題なのは、このゴールドシュテインのテロ行為を、避難するユダヤ人も数多くいる一方で、称賛

するユダヤ人も数多くいるということです。

ゴールドシュテインの墓には、「ユダヤ人、そしてイスラエルのために人生を捧げた」と刻まれ、一万人以上の支持者が、今も彼の墓に詣でているそうです。ジャーナリスト広川隆一氏のドキュメンタリー映画『パレスチナ1948・NAKBA』において、あるユダヤ人はこう語っています。

「ゴールドシュテインはもういない。しかし我々

には数多くのゴールドシュテインがいる」と。

ラビン首相とアラファト議長は、「オスロ合意」によって「ノーベル平和賞」を受賞しましたが、しかしゴールドシュテインのように、この合意に反対するユダヤ人も大勢いました。

パレスチナ人に譲歩するラビン首相に対して、過激なユダヤ人たちは「裏切者」と非難し、そしてラビン首相は、過激なユダヤ人によって殺害され

ました。

世界中が「これでようやく中東に平和が訪れる」と期待したのも束の間、「オスロ合意」は、呆気なく頓挫してしまったのです。

このように「イスラエル・パレスチナ問題」は、政治的に解決を試みたノーベル平和受賞者が、なんと2人も過激な同胞から殺害されているわけです。争いではなく平和を望んだカリスマ指導者が、

政治的に解決しようとしたら、同胞に殺害されたのです。

ですからこの問題は、まぎれもなく宗教問題であり、絶対に爆発させてはならない人類に仕掛けられた時限爆弾であり、宗教的な悟りを含んだ政治的解決が必要不可欠と言えるでしょう。

パンドラの箱の希望

すでに述べましたように、いかなる宗教を信じていようが、信じていなかろうが、生きとし生ける者は皆、魂の兄弟なのです。

それはつまり、地球人類は今、宗教の違いによって争いを起こし、文明が滅びかねない危機を迎えているわけですが、しかしその原因となっている「アブラハムの兄弟宗教」には、やはりある一定の

過ちがある、ということです。

それはユダヤ教、キリスト教、イスラム教の教えの中には、「皆が魂の兄弟に他ならない」という真理が欠けていることです。そのために彼らは、異教徒に対して、あまりにも無慈悲になっていると言えるでしょう。あるいは「転生輪廻」と「因果の理法」の教えがないことも、これらの宗教の問題点と言えるでしょう。

もしも宗教を否定すれば、訪れる世界は善悪が麻痺した世界ですから、人類は今、宗教の正邪を分けつつも、宗教の中から得られる悟りによって、宗教紛争を乗り越えていかねばなりません。アブラハムの時代より仕掛けられた、この時限爆弾を解決するためには、「悟りの力」が必要不可欠なわけです。

そしてこの宗教紛争を乗り越えられる「悟りの

力」を、この地球上で唯一、持っている宗教、それが『幸福の科学』です。

ギリシャ神話では、好奇心旺盛なパンドラという女性が箱を開けたことで、その箱の中からありとあらゆる禍が飛び出して、地上は大混乱に陥りました。しかし箱の中には、まだ「希望」が遺されていました。

その希望こそ、『幸福の科学』です。

たしかに日本では、多くの間違った宗教が現れては、社会的事件を起こして、人々を傷つけてきました。そのために、日本人は新しい宗教は嫌いかもしれません。

しかしもしも仮に、箱の中に１００個のリンゴがあり、そのうち９９個が腐っていれば、誰もが残りの１個も腐っているだろうと予測してしまいがちですが、しかし最後の１個だけが、芳醇の味わい

を保ったリンゴである可能性は捨て切れません。

すでに述べたように、「異なる宗教でも融和することもできる」、この大切な真実を最も知っている民は、日本人です。それはつまり、日本人こそ世界を救う使命を持った「救世の民」であるということです。

そして「救世の地」である日本に、新たに興った『幸福の科学』こそ、世界に残されたの全人類の最

期の希望の宗教なのです。

世界を救う武士道精神

では、今、私たち日本人に、果たして何が求められているのでしょうか？

「記紀」と呼ばれる、神道の『古事記』と『日本書紀』には、「神々が住まわれる山」とも称されて

いる富士山が、なぜか一度も登場しません。

しかし『宮下文書』によれば、古代の日本において、富士山の麓には王朝があったと記されております。

また、『秀真伝』には、「大宇宙にあるすべての魂は、造物主であられるアメノミヲヤから分かれたもの」という教えがあり、「生きとし生けるすべてのものに、神と同じ性質が備わっている」という教

えがあります。

つまり偽典とされている「古史古伝」を紐解くと、かつての縄文時代、富士の麓を中心に王朝が存在しており、当時の日本人は、今はその名さえ忘れ去られている「アメミヲヤ」という神を最高神、造物主として信仰していたことが分かるわけです。

そして『幸福の科学』総裁の大川隆法先生の霊査によれば、日本の起源は今から3万年前であり、ア

ンドロメダ銀河から、「天御祖神」という神がやってきて、富士山の麓に王朝を築いたことが分かっております。

この天御祖神こそ、武士道の源流であったのですが、しかし長い月日の中で、その教えは失われてしまい、神道は神話ばかりとなってしまいました。

その神道の心の教えが失われてしまった部分を、補完してきたのが、儒教であり、仏教であり、日本

人はこれらの宗教を融合させることで武士道を築き、侍精神を培ってきたわけです。

そして神道の『ホツマツタヱ』に描かれる「アメノミヲヤ」という神と、ユダヤ教で説かれている「エローヒム」、キリスト教のイエスが語った「天の父」、イスラム教で説かれている「アラー」、さらには儒教で説かれている「天帝」、仏教の『法華経』で説かれている「久遠実成の仏陀」、これらはすべ

て「大宇宙の造物主」という意味を持っています。

世界最古の歴史を誇る神秘の国である日本、かつて「大和」と呼ばれた、この国に生きる人々こそ、人類に仕掛けられた時限爆弾を回避する、「救世の民」であるわけですが、その「救世の心」とは、天御祖神に源流を持つ武士道精神と言えるでしょう。

天上天下唯我独尊

ハルマゲドンの危機にある中、ユダヤ人は古来より今もなお、メシアを待っています。キリスト教徒も、イエスをメシアと信じて、キリストを待っており、これは「メシア」という意味です。イスラム教徒も、彼らが「マフディー」と呼ぶ、終末の時代に現れるメシアを待っています。

メシアとは、仏陀の如く宗教的な悟りを持つと

共に、一つの国や民族のみならず、地球そのものをも救う政治的指導者とも言えるでしょう。

では、メシアはどこにいるのでしょうか。

アブラハム、モーセ、イエス、ムハンマドは預言者ですが、預言者とは「未来を予知する」という意味ではなく、「神の言葉を預かる」という意味です。すべての正しい宗教は、こうした預言とか、啓示によって始まってきたのです。

ですからモーセやイエスなどは、神から言葉を預かったわけですが、彼らが「神」と呼んだ存在は、大宇宙の造物主を指していると云われております。

一方で、悟りを開かれた仏陀は、造物主であられる「久遠実成の仏陀」と、完全に切り離された関係ではありません。

つまりモーセ、イエス、ムハンマドは、自分とは隔絶された、自分を遥かに超えた超越した存在が

おり、その存在のことを「神」と呼んだり、「天の父」と呼んだわけです。

しかし仏陀は違ったわけです。

なぜなら仏陀は、生きとし生けるすべてに仏と同じ悟りの可能性があり、すべての存在が仏性を持つ魂の兄弟であると共に、皆が根本仏とも繋がっている、そして仏陀ご自身に至っては、久遠実成の仏陀と合一の存在である、という大いなる悟り

を得られたからです。

「仏陀は地上に肉体を持ちながら、しかして仏陀は人間を超越した永遠の仏陀であった」、それは人間の姿ではない、巨大な奈良の大仏にも象徴されています。

このようにユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、「神人隔絶型の宗教」と言えるのですが、しかし実は仏教は「神人合一型の宗教」と言えるわけです。

それが「天上天下唯我独尊」という言葉の意味です。

つまり仏陀が語ったとされるこの言葉は、「天上界のいかなる神々、菩薩や如来よりも、地上のどんな人々よりも、私は悟りを極めた者である」という意味があるわけです。

そして仏陀も生まれ変わりを繰り返されているために、二千六百年前より以前にも、「過去七仏」

と言って、仏陀は様々な土地や地域に降臨されてきました。

たとえば中国の唐の時代に、鳥窠禅師というお坊さんがいました。白楽天という漢詩人が、その僧侶に「仏教とはどんな教えなのか？」と質問したところ、「諸悪莫作、衆善奉行」と答えました。「これは悪いことをせず、善いことを行う」という意味です。

それを聞いた白楽天は、「そんなことは3歳の子どもでも知っている」と言うと、その僧侶は「3歳の子どもでも知っているが、80歳の人でも実践できないんだよ」と答えたので、「なるほど」と感動したそうです。

「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」、これはつまり悪を作すこと莫く、善を行いし、自らの心を浄くする、是が仏の教えであり、これが

「七仏通誡偈」と言って、仏陀たちが共通して説かれてきたことです。

そしてその仏陀の魂のことを、「エル・カンターレ」と言うのです。

キリスト教に言う「主なる神」、ユダヤ教に言う「エローヒム」、イスラム教に言う「アッラー」、中国の孔子が言う「天帝」、神道の最高神である「天御祖神」、仏教の「久遠実成の仏陀」、これらは、す

べて同じ存在であり、エル・カンターレなのです。

確かに、それぞれの宗教は、考え方が違っておりますが、しかしその根源は一つだったのです。

復活した武士道

そして武士道の源流である天御祖神の教えも失われ、神道が神話ばかりとなっているように、仏教

も長い月日の中で、心の教えが失われてしまいました。

つまり武士道は天御祖神を源流に持ちますが、その教えが失われた部分を、儒教と仏教が補完してきたというのに、残念ながら仏教まで化石と成り果ててしまったわけです。武士道を構成していた神儒仏の一つの仏教が廃れてしまったわけです。

しかしアブラハムやイエスなどの預言者たちが、

啓示を受けたのと同じく、１９８１年３月、大川総裁に啓示が臨み、手が勝手に動く自動書記状態となり、「イイシラセ」、「イイシラセ」と紙に書かれました。

その後、最初の教えとして「人を愛し、人を生かし、人を許せ」という言葉が臨み、自らがエル・カンターレであることを自覚されました。

仏陀にしてメシアである、エル・カンターレの魂

の御本体が、「救世の地」である日本にお生まれになられ、『幸福の科学』が創設されたわけです。

そして『現代の武士道』も説かれ、ここに今、武士道が復活したのです。

この主なる神であり、愛の神の教えによってこそ、人類は「宗教の違い」を乗り越えていくことができます。アブラハムの頃より、人類に仕掛けられた時限爆弾を解決する鍵は、ここにあります。

宗教には間違ったものもありますが、正しいものもあり、宗教をすべて否定すれば、訪れるのは善悪が麻痺した社会ですから、人類は「悟りの力」によってハルマゲドンの危機を回避しなければなりません。

そしてその「悟りの力」があるのは、仏陀にしてメシアの教えである『幸福の科学』の教えに他なりません。

そして何度も述べましたように、日本人こそ、「宗教同士は調和することができる」ということを最も知っている民です。ですから日本人が霊的覚醒を遂げ、悟りを得なければ、この人類に仕掛けられた時限爆弾を回避することはできないでしょう。

だからお願いするのです。

「大和の民に、大和の誇りと大和の心を取り戻し

て欲しい」と。そしてつまらない偏見や先入観を捨てて、仏陀にして、メシアの教えに触れてください」と。

なぜなら貴方の心が世界を救い、貴方の心が世界を滅ぼすからです。

すべてのすべては、救世の使命を持った貴方の心、武士道精神にかかっているからです。

より強く優しくなりたい方、
熱く熱く人生を生きたい方、
人生に悩まれている方、
向上、悟りを求めている方、
侍のような人生を望まれる方、
『幸福の科学』に興味のある方、

ぜひこちらの動画を
ご覧下さい

大和魂

YAMATODAMASHII